編集後記

▼現代宗教研究所の所報として発刊された「現代宗教研究」も、今回で二十一号となり、中央教化研究会議は次回で第二十回目を迎えます。成人式がすぎ、やっと一人前となって一歩を踏み出したといったところです。第一号は昭和四十二年に発刊されていますが、その編集後記で木村勝行師は、「所報は、わが教団が当面している現代の諸問題について、その研究や調査の成果ともいうべきもの、あるいはその資料を提供して、諸聖の要望に資するものである」と述べられています。こうした意味では、ここ数回連続して発表されている過疎調査の報告は、宗会でも取り挙げられて対応策が協議されるようにもなり、京都二部では、管区の教師が集まって過疎対策の研究会が開かれる等、研究・調査の成果が宗門内でも重視されつつあります。しかしその反面、第一号の巻頭に挙げられている、「本尊論の再検討」のシンポジウムの投げかけた問題は、受け止め方も解らないまま、今日に至っているようです。

▼掲載した伊藤瑞叡先生の講義録は、法華経同一期間成立を主題としながら、現在、宗門教勢の沈滞化している教義学上の根源をも探る好個の内容です。

▼三原師の論文は、宗祖から現代の我々に至る中間点に優陀那和上を位置させて、宗学の近代化にアプローチしています。

▼鎌田師の「法座のすすめ」は、信行会活動の行詰りをどのように活性化させるかという難題に、体験を踏えて語る、感動深い講演録です。

▼佐藤氏の主張は、師檀一体となって総弘通を目指す宗門にとって、在家の立場からの率直な心動かされる講演録となっています。

▼その他、調査・研究報告等紙数の関係で割愛しなければならない程の原稿が集まり、所員一同嬉しい悲鳴をあげています。

▼第一号の初刊から今回に至るまで、御尽力下さった諸聖に、心より御礼申し上げて筆を置きます。

（赤堀記）